

二月二七日

四時二〇分目覚める。時差だ仕方ない。日経に原稿送ったのが今頃ゲラになっている筈で送りかえされてくるのを手にするのは明日になるだろう。上手くいけば良いのだが。GA HOUSEの二〇〇〇字今書いてしまおう。五時書き終えた。アト三時間又眠ろうかどうしようか迷っている。やっぱり眠ろう。何かメッセージが入っているらしい。TVの画面にコンピューター映像でそう伝えている。今日から二日はフィンランドの連中と完全休養でラップランドへ行く。マイナス三〇℃くらいらしいが、オーロラは期待しないで行った方が良さらしい。トナカイ牧場なんて行きたくネエよ。昨日は温度が高くヘルシンキは汚れた雪景色になった。黒い人影が通りを動く風景は哀切なものがある。ノルウェーのムンクもこんな風景の中で本来の孤独を深めてしまったのだろう。しかしムンクにも日没の光を描いた奇妙な絵があるらしく北欧には絵画的な光は無いというのは暴論であるらしい。日本大使館一等書記官からそう聞いた。ムンクのその絵を帰ったら探してみよう。ブルーモメントという時がフィンランドにはあるらしく、空も雪も雲も一瞬皆薄いブルーの光に満ちるらしい。視てみたいものだ。九時四〇分バスでHOTEL発空港へ。雪降りしきる。朝食は栄久庵さんとおしゃべりしながら。

十二時二〇分IVALLOへ飛ぶ。一時半過IVALLO着。北極圏である。流石何もない。バスでINARIへ。北海道の原野と

それ程のちがいはないが、何となく北極圏である。鈴木先生「イヤハヤ、とんでもないところへ来たナア」と一言。雪の原野をバスは豪然と走る。大丈夫なのか。小一時間でINARI自然民族博物館へ。たつぷりと見学。後、円錐形の木造小屋で夕食。昨夜のトナカイの肉よりも柔らかくて美味であった。ビールを飲み一息つく。マイナス六℃くらいとの事。マイナス三〇℃にはなるぞとおどかされて来たので拍子抜けする位だ。愉快に過して再びバスでRIEKONKIEPPIHOTELへ。二グループに分れ、栄久庵ソタマグループは製鉄会社のゲストハウスへ。我々は歩いてパーティに合流。疲れてあまり飲めず、喰わず。サウナに入ってもウクウクで早々に引上げた。フィンランドの連中は酒が強いので要注意なのだ。帰り径雪の中道に迷うが、何とかHOTELに辿り着けた。十二時前眠りにつこうとするが何故か眠れず。同室の鈴木さんはすぐにスヤスヤと寝息を立てて、チクシヨイ体力あるなという感じ。それでもいつやらウトウトと浅い眠りにつく。

二月二八日

七時、鈴木さんの眼覚し時計で起床。まだ眠い。朝食後バスが迎えに来て再びINARIへ。INARINPOROFARMを訪ねる。要するにラップランド人のトナカイ牧場である。トナカイが引くソリに乗ったりして、それでも楽しんだ。ソリに乗ったのは生まれて初めての事。昼食はコタと呼ばれるラップランドの円型小屋で。十五メートル直径位の円形平面で中心に暖炉仕立てのキッチン。煙が上の円い穴直径七〇センチメートル位から抜けてゆく。そこから光も落ちてきてエリアーデの聖と俗そのまの空間である。その薄暗さが何とも不思議な温もりを感じさせ

る。匂いと火が中心に在るのだ。住居の原形だろう。オリエンテーションへの考えを尋ねてみたが、良くわからなかった。円形の平面を選んだ途端に方位感覚はうすくなるのだろうか。海の方向とか風の方向とかラップランド衣裳を着た女性が説明してくれたが、今一つわからない。調べてみようか。モンゴルのゲルの生活とオリエンテーションの関係は研究室の海日汗に聞けばわかるかも知れない。(帰国後、海日汗に聞いたらモンゴルのゲルは東南に入口を開けるそうだ。)ノマドピープルとオリエンテーションの問題は大事だろう。洞穴寺院のオリエンテーションはどうか。ともあれコタは面白かった。来て良かった。ラップランドのオバさんの太鼓と歌も仲々良かった。モンゴルの感じとは少しちがう。しかしモンゴルにはラップランドの太鼓のようなのは無いのではないか。夕方、標高四百メートル程の白い山に登る。スキー場になっている。五時過ホテルへ戻り、今こうして日記を書いている。鈴木さんは気をきかせてくれてロビーへ待避。今夜はこれから八時にバスが来て何処かでディナーとオーロラのスライドショー。九時にIVALLO空港へ、十時〇五分の便でヘルシンキに戻り、空港ホテルで一泊。明日はシシリアへ行く。イイ旅になってきた。ラップランドはメルヴィルの白鯨に書かれている白の恐怖という事くらいしか知らなかったが、狩猟民族の文化に触れたのは良かった。作っている道具の何がしかはアイヌ民族のモノと類似しているように思った。ラップランドの人々はラップランドの人々にしか知れぬ悲哀もあるだろう。フィンランド人の根底に流れると言う暗ウツで屈折した感情の一端はここに起因して在るのではないかと勝手な事を考えているうちに今六時半、鈴木さんと話しにロビーへ行ってみようか。サウナに行った。

二十一時三〇分、IVALLO空港着。オーロラを見る為に用意

された山上のレストランから猛スピードのTAXIで走った。今夜オーロラは見る事ができるのだろうか。

雲の上に出てすぐヘルシンキに向って左手の窓にオーロラ、次いで右手にも巨大なオーロラが出現。緑色の見事なモノである。大満足。栄久庵さん達も地上で歓声を挙げているだろうか。緑の薄いカーテンがオリオン座の北極圏寄りに長い時間見えている。二三時前見事なヤツが全天にかかった。大満足。ユラユラ揺れてこれは凄い。二三時半ヘルシンキ空港着。十二時ラマダエアポートホテル着すぐ休む。今日は眠るぞ。

三月一日

朝五時半起床。荷作りをし直す。フィンランドの木造建築調べる必要がある。ログハウスを馬鹿にしてはいけない。森の学校の設計に本格的な木造を取り込んでみようか。聖徳寺の内部にも。あのコタの感じは良かった。ラマダホテルのスタイルは典型的なコマーシャルファンクシヨナリズムである。AIRPORTHOTEL特有な素気なさの固まりで、アランドロンが演ったサムライという映画の殺し屋の部屋のインテリアを思い出してしまった。我ながら積らぬ感傷である。一人赤面する。今日はフランクフルト、ローマ経由パレルモまで飛ぶ。一日飛行機を乗り継ぐわけですれなりに大変な一日である。

九時三〇分フルトハンザ機内へ。いつの間にか眠った。フランクフルトまでアト三〇分程。地上にはうつすらと緑の田園が見えている。ドイツにも春が来てるんだ。東京はすっかり春になっているだろう。我家もしのぎやすくなっているにちがいない。世田谷村のスタイルは気候としたらまさにアジアモンスーン地帯でしか通用しないな。ラップランドでは凍死しちゃう。フランクフル

ト着十一時二〇分。ラウンジでビールを飲んで時間を過す。鈴木さん買物へ。ローマ行は十三時四十五分。ラウンジから日経新聞へFAX打つ。非常に混んでいる。もう一本コラム書いておいた方が安全だな。四時三〇分ローマ空港で乗り継ぎ、今パレルモ行の飛行機に乗ったところ。ラゲージがまだ外に転がされている。パレルモ行BUNTONの機体の内部は全く仕切りが無い。最後部座席から操縦席のドアが開けられていてパイロットや計器が丸見え。もちろんビジネス、エコノミーの区別など全くない。シシリア使らしいなと意味のない感慨にふける。

十八時前シシリア島パレルモ空港着。荒々しい岩山の近くの空港で何となく予想していたシシリアとは違った。シシリアは山の島なんだ。ヨーロッパというよりもアジアに近い雰囲気のような。客引きのTAXIドライバーが寄ってきたりして、こんなのは久しぶりです。TAXIでGrandHOTELへ。随分にぎやかに市民が集まっている大ホテルだ。部屋は何の飾り気もない。外観のモノモノしさと比べ非常にちぐはぐである。七時半ロビーへ。レストランレジーナで食事。TAXIでチヨットぼられて帰る。マッタク、ポツラーレ、ポツラーレ、カンターレ、ウオホホホですよ。バカターレ。二十二時寝る。ここは面白そうだ。鈴木博之は相変わらず健脚である。明日はしごかれそうだ。

三月二日

朝八時二〇分日経文化局小林さんの電話で起こされる。昨日フランクフルト空港からのFAXメッセージが届いたらしい。しかし良く眠った。今日は歩かされる日になるから良かった。昨日はシシリアは二二℃だったから今日も暑くなるだろう。ラップランドと実に三〇℃の温度差である。

九時ホテルを出て歩き始める。混沌の極みの市場を通り抜けてカタコンベへ実に二時間四〇分歩きつめ。鈴木、水くらい飲ましてくれ。で十一時四〇分ピアッツァインディペンデンツァのカフェテリアで水を飲んでようやく休み。先が思いやられる。やっぱり鈴木は歩く人である。十三時MONREALE聖堂前のピザ屋でようやくピザにありつく。

十九時ホテル帰着。予想通り朝から歩きつめ。もう、クタクタ、へ口へ口。しかしながらMONREALEのカテドラルは興味深いものだった。鈴木教授のレクチャーでは、ジョサイヤ・コンドルの先生であつたウィリアム・バージェスがこのMONREALEの聖堂をいたく気に入っていたらしく、その影響をコンドル先生は受けたようだ。聖堂はロマネスク、イスラム、サラセン様式が入り混じつたもので、結果コンドルは日本近代建築様式は偽サラセン様式が望ましいとの説を持つようになったらしい。日本の近代建築様式の始まりにそのようなコンドルの考えがあつた事は面白い事ではある。辰野金吾はサラセンを受容する感性が無かつたのかどうか。シシリアまで来て、日本近代建築の起源に触れるエピソードに出会つたわけである。実に愉快極まる。

パレルモ聖堂はボケーツと抜けたノルマン様式との事。地下墓所を見る。今日は午前中カタコンベで沢山のミイラを見て、夕方パレルモ聖堂地下墓所で終つた。墓から墓への旅であつた。カタコンベの一九二〇年の二才の女の児のミイラは本来にまだ生きていたようで不思議な感慨を持った。キリスト教は忘れまい忘れまい、記憶せよ記憶せよという思想が根底にあるのではないか。それが聖堂になり、その特別なのがカタコンベの類になる。又、墓地のスタイルも写真や像が生々しく残される。都市にいたるところに歴史的人物の記念像を残そうとする。それに対して仏教は全

て忘れよう、忘れようと促すところがある。無常感はその最たるものだろう。輪廻の思想も死を生との境界線を薄くするように働いている。それ故に建築という概念、思想が日本では育たなかったようにも思う。しかしパレルモの旧市街を歩き、幾つかの聖堂を見る事が出来たのは良かった。しかし、良く歩いた一日であった。

夜八時ロビー。食事へ。ホテル近くの金城酒店へ。看板は立派だが味は難アリの中華料理店であった。日本の学生食堂の味そのモノ。シシリアとは言はぬ、パレルモの食文化は大丈夫なのか。若いシシリアンで満員であった。二十二時前、ホテルに帰る。今日は汗もかき、良い一日だった。明日は九時半ロビーの約束で部屋に帰る。このホテルはロビーに音楽家のワーグナーの像があり、尋ねるにワーグナーがしばらく滞在した歴史があるようだ。パレルモの街はいかにもワーグナー好みの、外の構えは大がかりで中は雑駁な印象が強い。ゲートもイタリア紀行中、シシリアは更にパレルモは世界で最も美しいイスラムの都市であると言明しているらしいのだが、ゲート、ワーグナーが絶賛したと言つ、おおらかな雑駁さがこの都市には在ると感じる。かの巨匠達が何がしかを過したドイツ・ワイマールに似た空気があるんだなあ。かく言つ日記をつけて二十二時三〇分休む。

三月三日

朝四時二〇分目覚めてしまう。考えるにゲートが旅で来た頃のパレルモはもつと大樹が街中に生い茂っていたのではないだろうか。昨日モンレアーレの聖堂裏のテラスで見たガジュマルの巨木を思い起こせば市街にももつとシユロの大木やガジュマルの樹があったのだろう。ワイマールは森は豊かだが生命力に溢れた大樹

は少ない。ゲートはそれでイチコロにまいった、それで世界で一番美しいイスラム都市だと書いたのであろう。ペルシャのシラーズのバラと同じ伝だな。パレルモの街のいたるところに園芸屋があつて、サボテンやら何やらを売っている。又庭作り用の妙な人工物、グロテスク一步手前の園芸用品も売られている。これだけ陽の光が強ければ植物は良く育つだろう。周辺の山々に植物があまり見られないのは土地が荒れているからではないだろう。ギリシャの森が人間の手で消された歴史があるように、ここも嘗々と亜熱帯の森、巨木生茂る森を人間が切り倒してきたにちがいない。フェニキア人の海上貿易には大きな船が必要だったろう。船体やマストを作るには巨大な樹が必需品であったと「森と文明」の著者は書いていたのを思い起こしているうちに又眠くなってきた。

八時半目覚める。シャワー洗濯。九時半ホテルを出てセントラルステーションへ。アグリジエントまでのチケット求めるもストライキで運休との事驚く。ホテルに戻りバス便を開き、又駅近くのバスステーションへ。グルグル探し廻りようやくアグリジエント行BUS特定。早い昼食をとる。カレー炊飯大ダンゴもどき。カフェテラスで陽気なシシリアンが唄など披露してくれる。バスでアグリジエントへ。バスストップからTAXIでギリシャ遺跡へ。紀元前四〇〇年〜前五六〇年くらいの神殿群を見学。花咲き乱れ美しい風景であつた。又、バスでの二時間の小旅行も車窓から絶景の連続であつた。月並みだが緑のじゅうたんが延々と拡がり荒れた岩山岩地とのコントラストが素晴らしいものであつた。ギリシャ神殿群はカルタゴにほろぼされたと言つが、古過ぎて何とも感慨が湧かぬ。修復の立札をチエックしていた鈴木博之が、これはアンコールワットにも来ている人物がやっていると教示。ウ

ーム、そうか、そういう世界なんだと又もワケの解らぬ納得の連続。こういう時はしばらく時が経ってからアレやコレやと思いが浮かぶものだろう。遺跡は海から程良い距離にあり、古代ギリシヤ神殿都市が海と深い関係を持つ事を思わせた。知識不足なのが残念。鈴木教授も流石もて余し気味であった。万能の人ではないのだから仕方ないが、持て余し気味の彼の姿を見て少々安心もする。TAXIで街に戻り並木道が見事なテラスで休む。これでフィンランド、ラップランド、シシリアの旅は終り。良く動いた。楽しかった。収穫も多かった。鈴木教授に感謝しよう。良い旅だった。ヨーロッパ北端から最南端まで飛んだが、多くを蓄積したような気がする。四時半のバスでパレルモに戻る。バスは超満員で、多分帰れたのはスレスレであったのではないか。パレルモ駅周辺は何故か機動隊が一杯つめており不穏な空気。フットボールの試合があつたのかもしれない。ホテルに戻り小休の後、シシリア及びラップランドの旅の最後のディナーへ。近くのイタリアンレストラン、ア・クツカーニヤへ。美味であった。ワイン二本空けてホテルへ、マティーニその他飲む、これも又美味であった。